

大学生の父－母－子の三者関係の認知と基本的対人態度との関連

橋本和幸*・高木秀明**

The Relationship between Basic Interpersonal Attitudes of University Students and Their Cognitions of the Tripartite Relations among Their Father, Mother and Themselves

Kazuyuki HASHIMOTO and Hideaki TAKAGI

1 問題

社会・文化・人間関係を重視する立場に立ち、新フロイト派と呼ばれる精神分析学者であるHorneyは、1930～40年代に主要な著作を発表したこともあり、いささか古典的に感じられることもある。しかし、発達初期の人格形成への家族の影響にふれているため、改めてその研究を積極的に評価する見解もみられる。例えば、近藤(1990)は、アメリカ文化を洞察した上で構築されたHorneyの理論は、太平洋戦争後アメリカの影響を強く受けてきた我が国を見る上で意義があるにとらえている。また、長谷川(1999)は、昨今の青少年の問題行動や児童虐待など家族がかかわる問題を解く鍵の一つとして、検討の価値があると論じている。

実際に、HorneyやFromm-Reichmann以降、精神分析学内部でも、発達初期の人格形成の要因として家族の影響を考慮する際に親子間の相互作用を重視する研究が見られるようになった。そして、その中でも、特に母子関係の研究が盛んに行われるようになった。その手法としては、初期の母子関係の直接的な観察が採られることが多かった。馬場(1990)は、主な研究者として、Frued,A., Bowlby, Spitz, Mahlerらの母子関係論を挙げている。それらを要約すると以下ようになる。

まず、Bowlbyは、アタッチメント研究で母親と乳幼児のかかわりを、乳児が早い時期からただ依存的なばかりではなく、主要な養育者である母親に自ら近づき、関心を持つようとしている相互作用的なかかわり方を見出している。

Frued,A.やSpitzらは、母性剥奪の研究から、母性的な養育環境や保護し養育する特定の人物や、養育に必要な刺激の重要性を論じている。この2つの主要な研究の他に、Mahlerの母子分離の過程を詳細に論じた研究や、Winnicottの「ほどよい母親 (good enough mother)」などが、自己及び自我の発達に果たす役割を重視した研究が挙げられている。

その一方で、父子関係の研究は、母子関係と比べてはるかに少ないが、その中で、指摘されていることを、馬場(1990)を参考に要約すると、次のようなことが言えるであろう。

父親は、乳児段階でも見慣れた、身近な存在であり、母親にやや遅れた時期にアタッチメントが形成される。さらに成長すると、母親とは異なる体験を与えてくれるもの、異なる関係性を結ぶものと見なされる。例えば、抱きかかえるという行為は、母親は世話をするために行うのに対して、父親の場合は遊ぶため、身体の動きを楽しませるために行うものである。父親は、乳児にとって自

* 平塚市子ども教育相談センター

** 学校教育講座

分を楽しませてくれる存在と見なされる。

また、母子関係に葛藤が起きた時に父親が緩衝役割を果たし、安定を促したり、母子の密着状態に介入して母子の分離を促進する役割も果たすとされている。こうした父親の役割によって、母子の閉じた二者関係から社会性の発達が促される側面もある。

さらに、父親・母親との二者関係のみならず、父-母-子の三者関係、すなわち家族全体と子どもとの相互作用を検討する視点も重要ではないかと考えられる。この場合には、家族心理学の視点が有効ではないかと考えられる。

馬場 (1990) によれば、家族療法の創始者の一人とされるAckermanは、Horneyらが論じた、家族間の相互作用が人格形成に与える影響、また、社会的、文化的な影響を示唆した観点の影響を受けている。Ackermanは、家族を1つのユニットと規定して、家族間での二者関係の影響を強く意識している。そして、個人の精神内界重視とシステム重視という二つの視点をつなぐ架け橋のような立場にたっている。Foley (1974) は、このようなAckermanの立場を「家族療法の祖父」と呼んでいる。

岡堂 (1990) によれば、1950年代に始まった家族関係を全体で把握する方向性は、60年代になると一般システム理論やサイバネティック理論などを取り入れて、「システムズ・アプローチ」という方向性を見出すようになった。この際に、家族は「全体としてまとまりのあるもの (family as a whole)」から「1つのシステム (family as a system)」と見なされるようになった。その代表例として、Bowenの「家族システム理論」、「ボウエン理論」や、Haley、Jackson、Batesonらによる「コミュニケーション理論」が挙げられる。

Foley (1974) によると、AckermanやBowenが個々人の精神内界にも関心を向けたことに対して、Haleyらは成員の精神内界よりも相互作用のシステムのあり方に関心を向けている。Haleyが指摘するように家族が1つのシステムであるとする、父母からの影響は子どもの社会化を強く推し進めることになる。松田 (1993) は、この時の父親の影響を「父親の間接的影響」、「システムとしての父-母-子関係」という言葉で表している。また、Lynn (1978) は「父母関係のモデリング」ととらえている。

以上のように、Horneyが指摘した「子どもの人格、基本的対人態度は、家族内の相互作用の影響を受ける」という観点は、その後の精神分析内部でもこのような相互作用の影響は自明のこととされている。また、Ackermanやその影響を受けて家族療法を発展させたシステム論者たちも、様々な形で家族間の相互作用を重視している。

このようなHorneyの主要理論の一つである基本的対人態度の形成と、家族内で起こる相互作用の関連は、学派を超えて認められており、このような関連を研究することは、個人の人格形成への父親、母親、家族全体の影響を探る上で有益であると考えられる。

2 目的

基本的対人態度への父親、母親、家族全体の影響のうち、子どもと父親・母親との二者関係については、養育体験の認知との関連という観点で、橋本・高木 (2005) ですでに検討されている。

そこで、本研究では、父-母-子の三者関係のあり方と子どもの基本的対人態度との関連を探るために、子どもの父親・母親との親密感と父母関係の認知という視点を導入し、これらと基本的対人態度の関連を検討した。

また、併せて、子どもの父親・母親との親密感及び父母関係の認知と、養育態度の認知との関連も検討した。

3 調査方法

3-1 調査期間

2001年11月2日～12月8日

3-2 調査対象

東京都と神奈川県の6つの大学の学部生。

3-3 調査方法

個別記入形式の質問紙調査を行った。配布方法は、直接手渡し、講義中の配布であった。そして、回収方法は、その場で回答して回収、配布した講義の次の回に持参してもらう、研究室の前に設置した質問紙回収箱に入れてもらうという3つの形式を採った。

3-4 調査内容

① 父親・母親との間に感じる心理的親密感

金子(1989)の心理的距離感尺度10項目を全て時制を過去形にしたうえに、「父(母)のことが好きだった」という項目を加えて、大学生が父親・母親それぞれとの間にこれまで感じてきた心理的な親密感を測定する尺度を作成した。この尺度は「心理的親密感尺度」と命名した。父と母それぞれについて全11項目で、5件法(「1.全くそう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.どちらとも言えない」「4.ややそう思う」「5.非常にそう思う»)で回答させた。なお、項目内容は表1に示す。

表1 父親・母親との心理的親密感尺度の項目内容

1	父(母)のことを信頼していた
2	父(母)は私の気持ちをよくわかってくれていると思った
3	父(母)と本当には理解し合えていないように思った
4	父(母)と気が合った
5	父(母)と一緒にいると心が安らいだ
6	父(母)とうまくいっていると思った
7	父(母)とは心のつながりが薄いように感じた
8	父(母)に対して反発したくなった
9	父(母)とのつながりはうわべだけのものであると思った
10	父(母)とは相容れないところがあった
11	父(母)のことが好きだった

② 父親・母親の養育態度の認知

先行研究を参考にして、親の養育態度を、受容、拒否、自由、干渉、世話、厳格の6次元からなるものと考えて、親の養育態度測定尺度の作成を試みた。質問項目は、EICA(辻岡・山本, 1976)、PBI(Parker, Tupling & Brown, 1979)の日本語版(北村, 1988)、そして、EMBU(Perris, Jacobson, Lindstroem, Knorrning & Perris, 1980)の日本語版(染矢・高橋・門脇, 1996)の項目の一部を選んで、時制を全て過去形に直して採用するとともに、予備調査の回答の一部と独自作成のものを加えた。そして、「親の養育態度認知尺度」73項目を父親と母親それぞれについて作成した。

なお、項目の内容と出典は、橋本・高木 (2005) を参照とする。回答は4件法 (「1. 全くなかった」「2. あまりなかった」「3. しばしばあった」「4. いつもそうだった」) で行わせた。

③ 父親・母親の夫婦関係の認知

上田 (1999) の父母の相互作用尺度20項目を、全て時制を過去形にしたうえで、「父と母はいろいろなことを助け合っていた」という項目を加えて、子どもが両親の夫婦関係をどのように認知しているかを測定する尺度を作成した。この尺度は3つの次元からなり、それぞれを「父から母への肯定的な働きかけ尺度」(項目1~7)、「母から父への肯定的な働きかけ尺度」(項目8~14)、「父母相互の肯定的な働きかけ尺度」(項目15~21)と命名した。各7項目ずつの計21項目から構成され、5件法 (「1. 全くそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらとも言えない」「4. ややそう思う」「5. 非常にそう思う」) で回答させた。なお、それぞれの項目内容は表2から4に示す。

表2 父から母への肯定的な働きかけ尺度の項目内容

1	父は家庭内の大事なことを決める時、まず母に相談した
2	父は母の趣味に関心を持っていた
3	父は自分の知らないことを気安く母にたずねていた
4	父は母の交友関係を知っていた
5	父は母が困っている時、何も言わなくても察することができた
6	父は自分が困っている時、母にそれを打ち明けていた
7	父は母の生き方を尊重していた

表3 母から父への肯定的な働きかけ尺度の項目内容

8	母は家庭内の大事なことを決める時、まず父に相談した
9	母は父の趣味に関心を持っていた
10	母は自分の知らないことを気安く父にたずねていた
11	母は父の交友関係を知っていた
12	母は父が困っている時、何も言わなくても察することができた
13	母は自分が困っている時、父にそれを打ち明けていた
14	母は父の生き方を尊重していた

表4 父母相互の肯定的な働きかけ尺度の項目内容

15	父と母は、けんかをして後々まで尾を引かなかった
16	父と母は、子どもの養育についてよく話し合っていた
17	父と母は二人だけで出かけることがあった
18	父と母はお互いの話によく耳を傾けていた
19	父と母との間には言葉にしなくても通じ合っている部分があった
20	父と母は意見が対立した時、十分に話し合っ解決しようとした
21	父と母はいろいろなことを助け合っていた

④ 基本的対人態度

西平 (1964) の「基本的対人態度測定尺度」30項目をそのまま使用した。

この尺度は、Horney (1945) の基本的対人態度を測定するために作成されたものである。西平はHorneyの理論に基づいて、3つの対人傾向(態度) (Toward, Against, Isolate) それぞれについて、消極的側面 (Poor) と積極的側面 (Good) を示す質問項目をそれぞれ5つずつ用意して、計30項目から構成される尺度を作成した。西平は、Horneyの3つの対人態度の基本的類型は、一般にも顕著に見られるが、神経症患者の場合とは異なって、健康で積極的な側面が優勢であり、反対に、不健康で消極的な側面が優勢になると神経症的な傾向が現れてくると考えた。

そこで、西平は、この2側面を入れて、基本的対人態度を次の3つのカテゴリーに分類している。

親和的態度の積極的側面-親和 (TG)

親和的態度の消極的側面-依存 (TP)

対立的態度の積極的側面-指導 (AG)

対立的態度の消極的側面-敵対 (AP)

回避的態度の積極的側面-独創 (IG)

回避的態度の消極的側面-孤立 (IP)

回答は5件法(「1. 全くそう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらとも言えない」「4. ややそう思う」「5. 非常にそう思う」)で行わせた。項目内容は表5に示す。

表5 基本的対人態度尺度の項目内容

	カテゴリー
1 私は人の気持ちを思いやる方だ。	親和
2 私は人の言うことに素直である。	親和
3 私は人に対して暖かく、世話をすることが好きだ。	親和
4 私は人から暖かい人だと思われている。	親和
5 私は年上の人からかわいがられる。	親和
6 私は人前に出ると相手に同調しやすい。	依存
7 私は人の言いなりになりやすい。	依存
8 私は人から甘えっ子だと思われている。	依存
9 私は人がいないと寂しいので、いつも人と一緒にいたい。	依存
10 私は、人生はなんとなく心細く、ひとりでは不安だと思う。	依存
11 私は人に対して忠告したり、意見を言ったりすることが多い。	指導
12 私は人から頼もしい人だと思われている。	指導
13 私は他人を指導する力がある。	指導
14 私は年下の人から尊敬される。	指導
15 私は人に頼らないで自分で判断し、行動することができる。	指導
16 私は人に対しても自分のわがままを通したい。	敵対
17 私は人と争うことが多い。	敵対
18 私は人から怖い人だと思われている。	敵対
19 私は一般的に反抗的である。	敵対
20 私は人生は戦いの場所であり、攻撃することをためらってはいけなと思う。	敵対
21 私はひとりでコツコツ仕事をするを好む性格である。	独創
22 私は人の言葉によって気持ちが混乱してしまうことは少ない。	独創
23 私は人に妨害されても、自分の考えに従って実行することができる。	独創
24 私は人それぞれの生き方を尊重することにしている。	独創
25 私は人から個性的な人だと思われている。	独創
26 私は人に対して冷淡である。	孤立
27 私は人と会いたくないことが多い。	孤立
28 私は人から孤独な人だと思われている。	孤立
29 私は、人生は結局孤独なのだと思う。	孤立
30 私には社交性がない。	孤立

⑤ フェイスシート

被験者の性別、年齢、学年、家族構成、及び父親と母親の年齢をたずねた。

4 結果

4-1 被験者

全部で555人分のデータを回収することが出来た(男性213名、女性337名、不明5名)。このうち、性別不明の者、父親・母親のいずれかとの離別を経験している者を除いた被験者を、分析の対象として採用することとした。その結果、被験者は、512名(男性200名・女性312名)で、平均年齢は19.4歳(18~25歳)、その父親の平均年齢は50.7歳(39~65歳)、母親の平均年齢は48.0歳(39~62歳)であった。

4-2 各尺度の分析

① 父親との心理的親密感尺度

全11項目で1つの尺度をなすものと考えて、この11項目で主成分分析を行った。その結果、項目8は、第2成分に負荷量が高かった(.880)。この項目8を含めて信頼性分析を行うとCronbachの α 係数が低くなるので、除外することとした。

改めて残り10項目で主成分分析を行うと、10項目すべてで第1成分の負荷量が高かったが、信頼性分析の結果は、項目10を含めるとCronbachの α 係数が若干下がり、修正I-T相関係数も低いことから、項目10も除外することにした。

残りの9項目で主成分分析を行うと、表6に示した通り、各項目の第1成分への負荷量も十分に高く(絶対値.736以上)、Cronbachの α も.929と十分に高かったので、この9項目を合計したものを「父親との親密感尺度」として採用することにした。

なお、各項目を、「1.全くそう思わない」を1点、「2.あまりそう思わない」を2点、「3.どちらとも言えない」を3点、「4.ややそう思う」を4点、「5.非常にそう思う」を5点として得点化したが、逆転項目の得点は反対にして尺度得点を算出した。得点が高いほどその尺度名の意味を有する。

② 母親との親密感尺度

全11項目で1つの尺度をなすものと考えて、この11項目で主成分分析を行った。その結果、項目8が第2成分で負荷量が高かった(.880)。この項目8を含めて信頼性分析を行うとCronbachの α 係数が低くなるので、除外することとした。

改めて残り10項目で主成分分析を行うと、10項目すべてで第1成分の負荷量が高かったが、信頼性分析の結果は、項目10を含めるとCronbachの α 係数が若干下がり、修正I-T相関係数も低いことから、項目10も除外することにした。

残りの9項目で主成分分析を行うと、表7に示した通り、各項目の第1成分への負荷量も十分に高く(絶対値.667以上)、Cronbachの α も.924と十分に高かったので、この9項目を合計したものを「母親との親密感尺度」として採用することにした。

なお、各項目を、「1.全くそう思わない」を1点、「2.あまりそう思わない」を2点、「3.どちらとも言えない」を3点、「4.ややそう思う」を4点、「5.非常にそう思う」を5点として得点化したが、逆転項目の得点は反対にして尺度得点を算出した。得点が高いほどその尺度名の意味を有する。

表6 父との心理的親密感尺度の主成分分析

	成分1	共通性
6 父とうまくいっていると思った。	.870	.757
11 父のことが好きだった。	.846	.715
5 父と一緒にいると心が安らいだ。	.833	.694
7 父とは心のつながりが薄いように感じた。	-.805	.649
4 父と気が合った。	.802	.643
1 父のことを信頼していた。	.795	.632
2 父は私の気持ちをよくわかっていていると思った。	.762	.581
9 父とのつながりはうわべだけのものであると思った。	-.741	.549
3 父と本当に理解し合えていないように思った。	-.736	.541
	寄与率	64.02%

表7 母親との心理的親密感尺度の主成分分析

	成分1	共通性
6 母とうまくいっていると思った。	.858	.736
5 母と一緒にいると心が安らいだ。	.850	.723
7 母とは心のつながりが薄いように感じた。	-.848	.718
11 母のことが好きだった。	.814	.663
1 母のことを信頼していた。	.790	.624
4 母と気が合った。	.771	.595
9 母とのつながりはうわべだけのものであると思った。	-.764	.584
2 母は私の気持ちをよくわかっていていると思った。	.735	.540
3 母と本当に理解し合えていないように思った。	-.667	.445
	寄与率	62.55%

③ 父親・母親の夫婦関係の認知について

a. 父親から母親への肯定的な働きかけについて

項目1から7までの全7項目で1つの尺度をなすものと考えて、この7項目で主成分分析を行った。その結果、表8に示した通り、第1成分への各項目の負荷量は十分に高く（.634以上）、Cronbachの α も.814と十分に高かったので、この7項目全てを合計したものを「父親から母親への肯定的な働きかけ尺度」として採用することにした。

なお、各項目を、「1.全くそう思わない」を1点、「2.あまりそう思わない」を2点、「3.どちらとも言えない」を3点、「4.ややそう思う」を4点、「5.非常にそう思う」を5点として得点化した。得点が高いほどこの尺度名の意味を有する。

b. 母親から父親への肯定的な働きかけについて

項目8から14までの全7項目で1つの尺度をなすものと考えて、この7項目で主成分分析を行った。その結果、表9に示した通り、第1成分への各項目の負荷量は十分に高く（.558以上）、Cronbachの α も.813と十分に高かったので、この7項目全てを合計したものを「母親から父親への肯定的な働きかけ尺度」として採用することにした。

なお、各項目を、「1.全くそう思わない」を1点、「2.あまりそう思わない」を2点、「3.どちらとも言えない」を3点、「4.ややそう思う」を4点、「5.非常にそう思う」を5点として得点化した。得点が高いほどこの尺度名の意味を有する。

c. 父親と母親相互の肯定的な働きかけについて

項目15から21までの全7項目で1つの尺度をなすものと考えて、この7項目で主成分分析を行った。その結果、表10に示した通り、第1成分への各項目の負荷量が十分に高く（.592以上）、Cronbachの α も.863と十分に高かったので、この7項目全てを合計したものを「父親と母親相互の肯定的な働きかけ尺度」として採用することにした。

なお、各項目を、「1.全くそう思わない」を1点、「2.あまりそう思わない」を2点、「3.どちらとも言えない」を3点、「4.ややそう思う」を4点、「5.非常にそう思う」を5点として得点化した。得点が高いほどこの尺度名の意味を有する。

表8 父から母への肯定的働きかけ尺度の主成分分析

	成分1	共通性
6 父は自分が困っている時、母にそれを打ち明けていた	.718	.515
5 父は母が困っている時、何も言わなくても察することができた	.717	.515
7 父は母の生き方を尊重していた	.709	.502
1 父は家庭内の大事なことを決める時、まず母に相談した	.698	.488
2 父は母の趣味に関心を持っていた	.688	.473
4 父は母の交友関係を知っていた	.646	.417
3 父は自分の知らないことを気安く母にたずねていた	.634	.403
寄与率	47.31%	

表9 母から父への肯定的働きかけの主成分分析

	成分1	共通性
13 母は自分が困っている時、父にそれを打ち明けていた	.736	.542
10 母は自分の知らないことを気安く父にたずねていた	.736	.542
14 母は父の生き方を尊重していた	.732	.535
8 母は家庭内の大事なことを決める時、まず父に相談した	.710	.504
12 母は父が困っている時、何も言わなくても察することができた	.672	.452
9 母は父の趣味に関心を持っていた	.656	.430
11 母は父の交友関係を知っていた	.558	.312
寄与率	47.38%	

表 10 父母相互の肯定的な働きかけの主成分分析

		成分 1	共通性
18	父と母はお互いの話によく耳を傾けていた	.848	.719
21	父と母はいろいろなことを助け合っていた	.841	.707
19	父と母との間には言葉にしなくても通じ合っている部分があった	.788	.621
20	父と母は意見が対立した時、十分に話し合って解決しようとした	.772	.596
16	父と母は、子どもの養育についてよく話し合っていた	.696	.484
15	父と母は、けんかをして後々まで尾を引かなかった	.645	.416
17	父と母は二人だけで出かけることがあった	.592	.350
	寄与率	55.61%	

④ 基本的対人態度測定尺度

基本的対人態度測定尺度の尺度分析については、橋本・高木 (2005) で行われた通りである。その結果と同様に、表11に示す20項目を今後の分析に用いることとする。

表 11 基本的対人態度尺度の因子分析 (Promax 回転)

項目番号/項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
13. 私は他人を指導する力がある	.790	-.018	-.052	-.040	-.004	.028	-.060
14. 私は年下の人から尊敬される	.693	.079	.094	.007	.036	-.078	-.080
12. 私は人から頼もしい人だと思われている	.617	-.006	.035	.013	-.046	.008	.181
28. 私は人から孤独な人だと思われている	.075	.796	-.025	-.045	.141	.056	.157
27. 私は人と会いたくないことが多い	.005	.605	-.029	-.038	-.082	-.039	-.082
30. 私には社交性がない	-.043	.602	.009	.083	-.063	-.166	-.177
29. 私は、人生は結局孤独なのだと思う	-.008	.476	.039	.010	.024	.266	.027
4. 私は人から暖かい人だと思われている	.212	-.040	.704	.040	-.023	.031	-.204
1. 私は人の気持ちを思いやる方だ	-.100	.028	.676	-.096	.050	-.079	.072
3. 私は人に対して暖かく、世話をすることが好きだ	.166	-.035	.386	.159	.038	-.001	.134
7. 私は人の言いなりになりやすい	-.081	.001	.056	.865	-.039	.118	.033
6. 私は人前に出ると相手に同調しやすい	.071	-.027	-.056	.604	.035	-.135	.060
9. 私は人がいないと寂しいので、いつも人と一緒にいたい	.110	-.093	-.046	-.004	.813	-.014	-.055
10. 私は、人生はなんとなく心細く、ひとりでは不安だと思う	-.106	.155	.087	.017	.647	.005	.051
20. 私は人生は戦いの場所であり、攻撃することをためらってはいけないと思う	-.152	.017	.112	-.037	-.008	.652	-.030
17. 私は人と争うことが多い	.114	.026	-.216	.043	-.018	.464	-.069
16. 私は人に対しても自分のわがままを通したい	.096	.029	-.184	.028	.040	.295	-.123
24. 私は人それぞれの生き方を尊重することになっている	-.032	-.035	.004	.028	.033	-.079	.574
21. 私はひとりでコツコツ仕事をするを好む性格である	.047	.103	-.072	.119	-.178	-.079	.292
15. 私は人に頼らないで自分で判断し、行動することができる	.188	.034	.088	-.200	-.196	.064	.215

因子間相関	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6	因子 7
因子 2		-.379					
因子 3			.124				
因子 4				.309			
因子 5					.088		
因子 6						.251	
因子 7							.027

回転前の累積寄与率 43.51%

4-4 親の養育態度の認知と父母との親密感・父母関係の認知との関係

① 男性の場合

親の養育態度の認知と父母との親密感・父母関係の認知との関係を検討するために、父親・母親の養育態度認知の8尺度群と、父母との親密感・父母関係認知の5尺度群とで、男女別に正準相関分析を行った。

その結果、表12に示した通り、男性については有意な正準相関係数が3つ得られた。

まず、第1成分を見ると、父母関係・父母との親密感側は、父親との親密感(.876)、母親との親密感(.610)、父から母への肯定的な働きかけ(.623)、母から父への肯定的な働きかけ(.743)、父母相互の肯定的な働きかけ(.791)と全ての尺度に高い構造係数が示された。一方、養育態度側は、父受容(.905)、父拒否(-.556)、母受容(.528)、母拒否(-.471)となり、父受容尺度が非常に高い構造係数を示していた。このことから言えることは、父母との親密感や夫婦関係の良いことは、両親に受容されている、拒否されていないと感じることにつながるということである。特に、父親に受容されていると感じることには顕著に影響していると言える。これによって、第1成分は「父親に受け入れられていること」に関係する要因を表すものと解釈できるのではないかと考えられる。

表12 父母との親密感・父母関係の認知と親の養育態度の認知との正準相関構造行列(男性)

	成分1	成分2	成分3
<養育態度>			
父受容	.905	-.242	.034
父自由	.236	.271	-.666
父干渉	-.175	-.240	.750
父拒否	-.556	-.108	.656
母受容	.528	.734	.195
母自由	.132	.421	-.498
母干渉	-.091	-.357	.385
母拒否	-.471	-.458	.121
<親との親密感>			
父との親密感	.876	-.252	-.383
母との親密感	.610	.788	.013
<父母関係>			
父から母への肯定的な働きかけ	.623	-.381	.602
母から父への肯定的な働きかけ	.743	-.188	.514
父母相互の肯定的な働きかけ	.791	-.221	.386
<hr/>			
正準相関係数	.816	.737	.395
近似F	10.356	6.250	1.693
自由度	(40, 682.78)	(28, 567.49)	(18, 447.38)
P	.000	.000	.038

続いて、第2成分を見ると、父母関係・父母との親密感側は、母親との親密感(.788)が高い構造係数を示した。一方、養育態度側は、母受容(.734)、母拒否(-.458)が高い構造係数を示した。このことから言えることは、母親に受け入れられている、あるいは拒否されていないと

感じる時には、母親との親密感を感じているということである。また、父親の時とは異なって、母親に受容されていると感じることには父母関係は影響をしていないと言える。よって、第2成分は「母親に受け入れられていること」に関係する要因を表すものと解釈することができるのではないかと考えられる。

以上のことより、母親に受容されていると感じることに影響するのは母親との親密感のみであり、他は主要な要因とはなり得ていないと考えられる。

最後に、第3成分は、父母関係・父母との親密感側は、父から母への肯定的な働きかけ(-.602)と母から父への肯定的な働きかけ(.514)が高い構造係数を示した。一方、養育態度側は、父自由(-.666)、父干渉(.750)、父拒否(.656)、母自由(-.498)が高い構造係数を示し、特に、父親の養育態度に関係する3つの尺度の点数が高くなった。このことから言えることは、父親と母親がそれぞれに対して肯定的な働きかけを多くしているほど、父親は干渉的で拒否的になり、父親と母親がともに自由を認めなくなると子どもが感じるということである。すなわち、父母関係が良好な場合、子どもは父親から多くの働きかけをされていると感じ、さらに両親から束縛されていると感じるようになると言えるであろう。以上のことから、第3成分は「父親からの拒否的な束縛」に関係する要因を表すものと解釈することができるものと考えられる。

② 女性の場合

表13に示した通り、女性についても有意な正準相関係数が3つ得られた。この結果は、男性と同じ構造を示すものであった。

表 13 父母との親密感・父母関係の認知と親の養育態度の認知との正準相関構造行列(女性)

	成分 1	成分 2	成分 3
<養育態度>			
父受容	.952	-.106	.108
父自由	.024	.045	-.477
父干渉	-.185	-.055	.509
父拒否	-.639	.060	.605
母受容	.520	.778	.069
母自由	.044	.302	-.612
母干渉	-.241	-.399	.408
母拒否	-.471	-.548	.249
<親との親密感>			
父との親密感	.945	-.255	-.154
母との親密感	.553	.823	-.060
<父母関係>			
父から母への肯定的な働きかけ	.724	-.048	.669
母から父への肯定的な働きかけ	.721	.034	.407
父母相互の肯定的な働きかけ	.804	.002	.333
<hr/>			
正準相関係数	.823	.719	.245
近似 F	16.584	9.102	1.850
自由度	(40, 1153.54)	(28, 956.89)	(18, 752.85)
P	.000	.000	.017

まず、第1成分を見ると、父母関係・父母との親密感側は、父親との親密感(.945)、母親との親密感(.553)、父から母への肯定的な働きかけ(.724)、母から父への肯定的な働きかけ(.721)、父母相互の肯定的な働きかけ(.804)と全ての尺度に高い構造係数が示された。一方、養育態度側は、父受容(.952)、父拒否(-.639)、母受容(.520)、母拒否(-.471)となり、父受容尺度が特に高い構造係数を示した。このことから言えることは、父母との親密感や父母関係の良いことは、両親に受容されている、拒否されていないと感じることにつながるということである。特に、父親に受容されていると感じることには顕著に影響していると言える。以上のことから、第1成分は「父親に受け入れられていること」に関係する要因を表すものと解釈できるのではないかと考えられる。

続いて、第2成分を見ると、父母関係・父母との親密感側は、母親との親密感(.823)が高い構造係数を示した。一方、養育態度側は、母受容(.778)、母拒否(-.548)が高い構造係数を示した。このことから言えることは、母親に受け入れられている、あるいは拒否されていないと感じる時には、母親との親密感を感じているということである。また、父親の時とは異なって、母親に受容されていると感じることには父母関係は影響をしていないと言える。よって、第2成分は「母親に受け入れられていること」に関係する要因を表すものと解釈することができるのではないかと考えられる。

以上より、母親に受容されていると感じることに影響するのは母親との親密感のみであり、他は主要な要因とはなり得ていないと言えるであろう。

最後に、第3成分は、父母関係・父母との親密感側は、父から母への働きかけ(.669)が高い構造係数を示し、母から父への肯定的な働きかけ(.407)も中程度の構造係数を示した。一方、養育態度側は、父自由(-.447)、父干渉(.509)、父拒否(.605)、母自由(-.612)が高い構造係数を示した。このことから言えることは、父親と母親がそれぞれに対して肯定的な働きかけを多くしているほど、父親は干渉的で拒否的になり、父親と母親がともに自由を認めなくなると子どもが感じるということである。すなわち、父母関係が良好な場合、子どもは父親から多くの働きかけをされていると感じ、さらに両親から束縛されていると感じるようになると言えるであろう。これは特に、父親から母親への働きかけの影響の方が大きいと言える。以上のことから、第3成分は「父親からの拒否的な束縛」に関係する要因を表すものと解釈することができるものと考えられる。

以上の結果より、男女を比較すると、構造係数の値は異なっているも、成分の数とその中にある尺度の内容はほぼ同様である。したがって、父母関係・父母との親密感と親の養育態度との関連について男女差は見られないという結論が得られた。

4-5 子どもの基本的対人態度と父母との親密感及び父母関係の認知との関係

① 男性の場合

男性について、従属変数を子どもの基本的対人態度に関する6尺度、独立変数を父母関係の認知及び父母との親密感に関する5尺度とした重回帰分析(ステップワイズ法)を繰り返し行って、パス解析を行った(表14参照)。

その結果を見ていくと、親和性尺度に対しては、母との親密感尺度と父から母への肯定的な働きかけ尺度から有意な正のパスが引かれ、指導性尺度に対しては母親との親密感尺度から有

意な正のパスが引かれた。そして、孤立性尺度には父親との親密感尺度から正のパスが引かれた。

表 14 男性の基本的対人態度を従属変数、親との親密感・父母関係の認知を独立変数とした重回帰分析

従属変数/独立変数	標準偏回帰係数
親和性 (TG) /	
母親との親密感	.299 ***
父から母への肯定的な働きかけ	.180 *
$R^2=.139, F(2, 192)=15.47***$	
依存性 (TP) /	
なし	
指導性 (AG) /	
父親との親密感	.206 **
母親との親密感	.172 *
$R^2=.098, F(2, 191)=10.37***$	
敵対性 (AP) /	
なし	
独創性 (IG) /	
なし	
孤立性 (IP) /	
父親との親密感	-.255 **
母親との親密感	-.203 **
$R^2=.144, F(2, 188)=15.87***$	

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

すなわち、男性は、母親との間に親密感を感じていたり、父親が母親に肯定的な働きかけをしていたと感じるほどに、人に対して親和的な態度をとるようになり、さらに、母親との親密感是指導的な態度をとるようになることにもつながる。そして、父親と親密さを持てなかったと感じると孤立的な対人態度をとるようになるということが言える。これらの関係を表すパスダイアグラムを図1に示す。

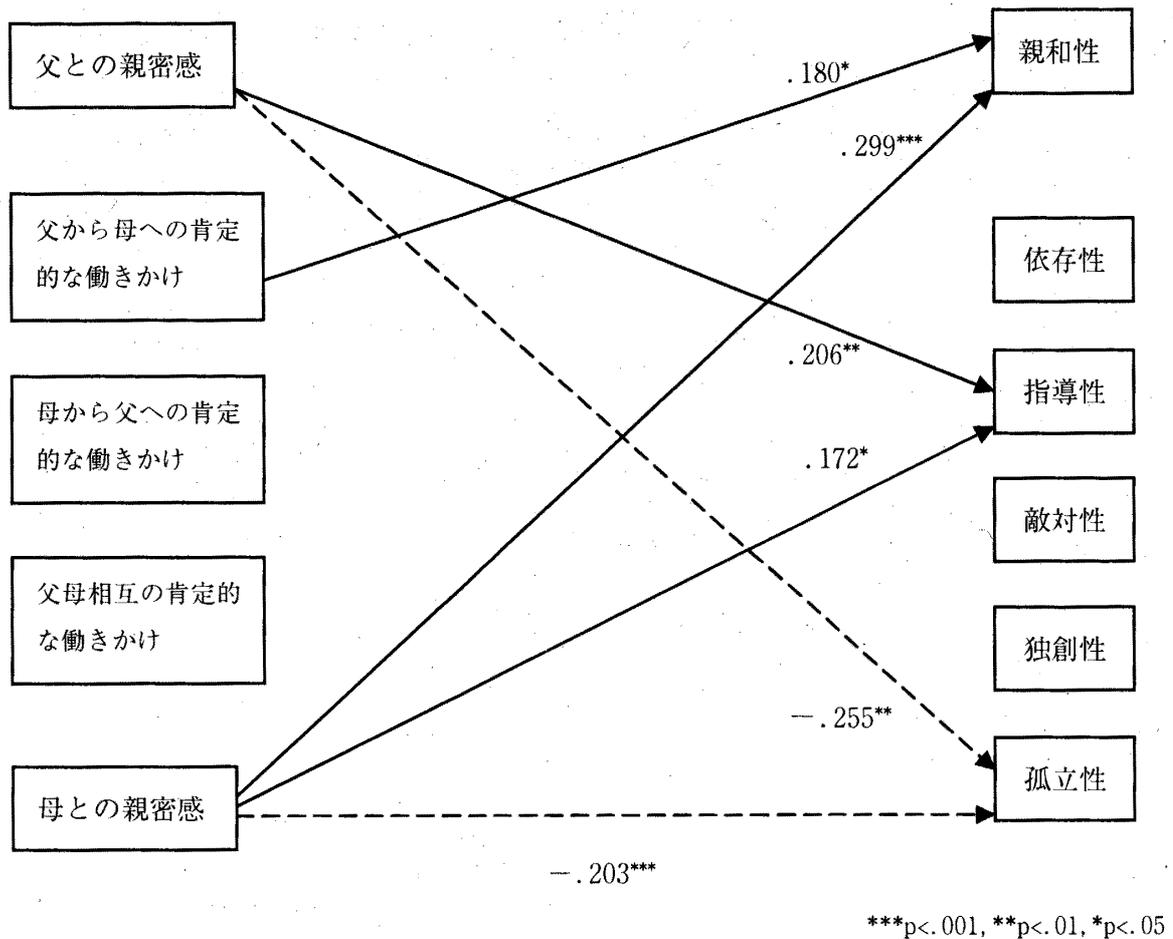


図1 父親・母親との親密感及び父母関係の認知と男性の基本的対人態度との関係

② 女性の場合

女性について男性と同様に、従属変数を子どもの基本的対人態度に関する6尺度、独立変数を父母関係の認知及び父母との親密感に関する5尺度とした重回帰分析（ステップワイズ法）を繰り返し行って、パス解析を行った（表15参照）。

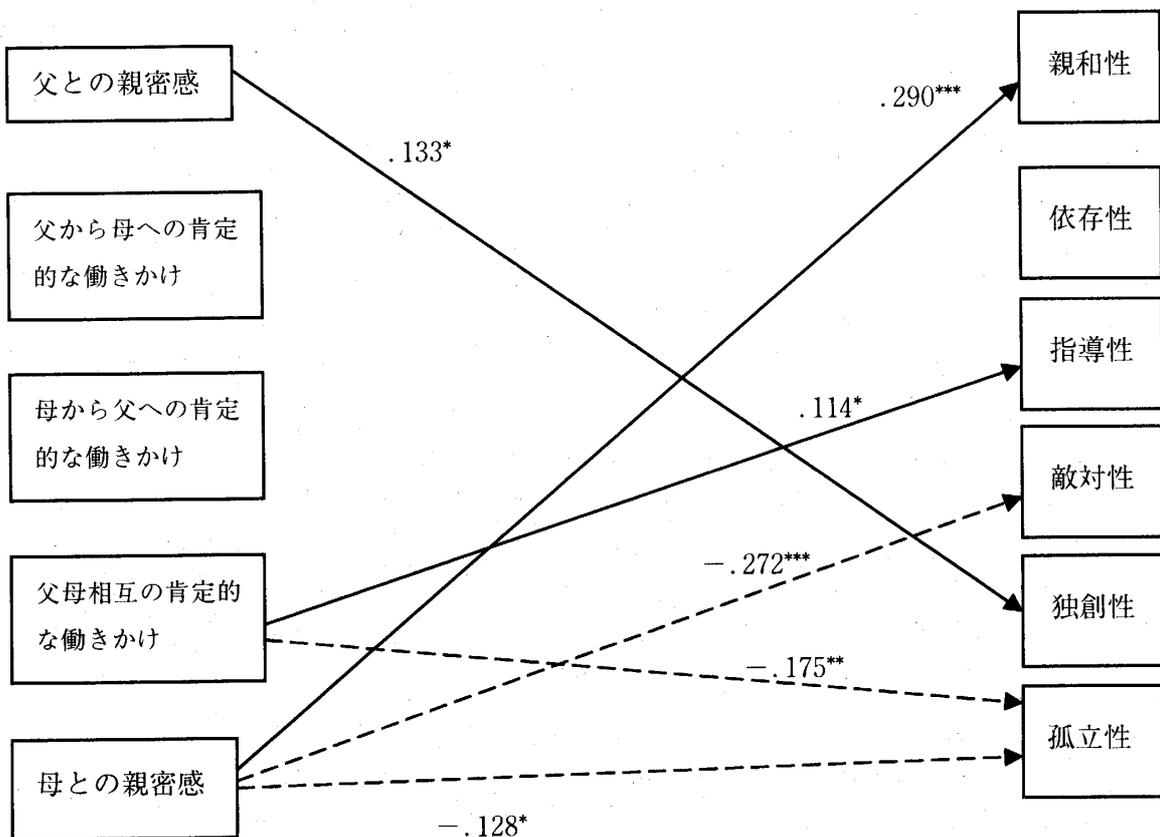
その結果を見ていくと、父母との親密感及び父母関係の認知との関係では、親和性尺度に対しては母との親密感尺度から有意な正のパス、依存性尺度には父親との親密感尺度から有意な正のパス、そして、敵対性尺度に対しては母親との親密感尺度から有意な負のパス、依存性尺度には父母相互の肯定的な働きかけ尺度から有意な負のパスがそれぞれ引かれた。

すなわち、母親との関係に親密さを感じていた女性は、親和的な対人態度をとるようになり、父親との関係に親密さを感じていると依存的な態度をとるようになっている。そして、母親と親密さを感じられなかった女性は、敵対的な対人態度をとり、父母の間に相互の肯定的な働きかけが少なかったと感じていると、人に対して孤立的な態度をとるようになると言える。これらの関係を表すパスダイアグラムを図2に示す。

表 15 女性基本的の対人態度を従属変数、親との親密感・父母関係の認知を独立変数とした重回帰分析

従属変数/独立変数	標準偏回帰係数
親和性 (TG) / 母親との親密感	.290 ***
R ² =.084, F(1,302)=27.83***	
依存性 (TP) / なし	
指導性 (AG) / 父母相互の肯定的な働きかけ	.114 *
R ² =.013, F(1,302)=4.01*	
敵対性 (AP) / 母親との親密感	-.272 ***
R ² =.074, F(1,274)=13.08***	
独創性 (IG) / 父親との親密感	.133 *
R ² =.013, F(1,301)=5.45*	
孤立性 (IP) / 父母相互の働きかけ 母親との親密感	-.175 ** -.128 *
R ² =.064, F(2,302)=10.27***	

***p<.001 **p<.01 *p<.05



***p<.001, **p<.01, *p<.05

図 2 父親・母親との親密感及び父母関係の認知と女性の基本的対人態度との関係

③ まとめ

①と②の男女別の結果をまとめると、次のようになるものと考えられる。

父母との親密感・父母関係の認知と基本的対人態度との関係を見ると、男女ともに母親との間に親密感を強く感じていると、親和的な対人態度をとるようになっていた。

また、男性の場合は、父親との間に強い親密感を感じていたら、対人態度が孤立的ではなく、母親との間に親密感を感じていたら、指導的な態度をとるようになっていた。そして、父親から母親への肯定的な働きかけがあったと認知していても、対人態度が親和的になっていった。

一方、女性の場合は、父親との間に親密感を感じていたら、依存的な対人態度をとるようになり、母親との間の親密感があった時には、敵対的な態度をとらないようになっていた。そして、父母相互の肯定的な働きかけがあったと認知していると、孤立的な態度をとらなくなるという結果が得られた。

4-6 肯定的・否定的対人態度と親との親密感及び父母関係の認知との関連

① 肯定的・否定的対人態度群への群分け

西平(1964)は、基本的対人態度測定尺度を作成した際に、親和-依存型(T)、指導-敵対型(A)、独創-孤立型(I)という内容に関係なく、好ましい対人態度と好ましくない対人態度という2つの次元を想定した。そして、前者をGood得点、後者をPoor得点として、「Good得点÷Poor得点」の高低によってその被験者の対人態度が好ましいものか否かを検討しようとした。本研究においても、この西平(1964)の考えに倣って、被験者を肯定的対人態度群と否定的対人態度群に分けた上で、この両群間で親との親密感及び父母関係の認知に差があるかを検討した。

まず、肯定的対人態度群と否定的対人態度群への群分けの方法であるが、基本的には西平と同様に、Good得点を親和性尺度(TG)と指導性尺度(AG)と独創性尺度(IG)の合計得点、Poor得点を依存性尺度(TP)と敵対性尺度(AP)と孤立性尺度(IP)の合計得点とする。ただし、本研究では西平(1964)とは異なり、Good得点が9項目、Poor得点の合計が11項目で項目数が均一ではなかった。そこで、Good得点は、親和性尺度(TG)、指導性尺度(AG)、独創性尺度(IG)がいずれも3項目で均一なので、9項目の合計得点を9で割ったものを「肯定的対人態度得点」として取り扱うこととした。一方、Poor得点については、依存性尺度(TP)と孤立性尺度(IP)が4項目で、敵対性尺度(AP)が3項目と項目数が均等ではないので、尺度ごとに項目数で割ったものを足して、それを3で割ったものを「否定的対人態度得点」として取り扱うことにした。すなわち、 $\{(TP/4) + (AP/3) + (IP/4)\} / 3$ とした。

そして、「肯定的対人態度得点÷否定的対人態度得点」を「肯定的・否定的対人態度尺度」として、この尺度を用いて群分けを行った。具体的には、尺度得点の分布の様子を見て(平均値: 1.26点, レンジ: 0.41点から3.05点)、上位20% (1.51点から3.05点)を肯定的対人態度群、下位20% (0.41点から0.98点)を否定的対人態度群として取り扱うこととした。

② 結果

親との親密感や両親の関係を子どもがどのように感じているかということが、子どもが肯定的な対人態度をとるか、否定的な対人態度をとるかということに影響を与えているかどうかを

検討するため、従属変数を父親・母親との親密感尺度、父親・母親の夫婦関係認知尺度として、t検定を用いて男女別に肯定的対人態度群と否定的対人態度群の平均得点の比較を行った。その結果を、男性については表16、女性については表17にそれぞれ示した。

表 16 肯定的・否定的対人態度群の親との親密感及び父母関係の認知の差 (男性)

	対人態度	N	平均値	標準偏差	t 値	自由度
父との親密感	肯定群	55	31.85	7.30	5.02 ^{***}	114
	否定群	61	25.34	6.68		
母との親密感	肯定群	55	35.15	5.97	4.25 ^{***}	114
	否定群	61	30.07	6.80		
父から母への肯定的な働きかけ	肯定群	55	20.27	5.15	0.08	113
	否定群	60	20.20	4.56		
母から父への肯定的な働きかけ	肯定群	55	24.67	5.12	2.50 [*]	114
	否定群	61	22.46	4.40		
父母相互の肯定的な働きかけ	肯定群	55	22.95	5.72	2.53 [*]	114
	否定群	61	20.38	5.22		

***p<.001, *p<.05

表 17 肯定的・否定的対人態度群の親との親密感及び父母関係の認知の差 (女性)

	対人態度	N	平均値	標準偏差	t 値	自由度
父との親密感	肯定群	102	33.36	9.00	2.54 [*]	189
	否定群	89	30.06	8.92		
母との親密感	肯定群	103	39.62	6.32	4.71 ^{***}	190
	否定群	89	35.13	6.88		
父から母への肯定的な働きかけ	肯定群	103	24.19	5.72	3.15 ^{**}	189
	否定群	88	21.50	6.10		
母から父への肯定的な働きかけ	肯定群	103	26.87	5.16	3.11 ^{**}	190
	否定群	89	24.54	5.21		
父母相互の肯定的な働きかけ	肯定群	101	25.09	6.60	4.28 ^{***}	188
	否定群	89	21.10	6.16		

***p<.001, **p<.01, *p<.05

その結果をまず男性から見えていくと、肯定的対人態度群の方が有意に得点が高かったのは、父との親密感 ($t=5.02$, $df=114$, $p<.001$)、母との親密感 ($t=4.25$, $df=114$, $p<.001$)、母から父への肯定的働きかけ ($t=2.50$, $df=114$, $p<.05$)、父と母相互の肯定的な働きかけ ($t=2.53$, $df=114$, $p<.05$) の各尺度であった。一方、否定的対人態度群の方が有意に得点が高いものは見られなかった。したがって、肯定的な対人態度をとる群は、親と親密な関係にあると感じており、また、父親と母親の関係を肯定的なものにとらえていると言える。

続いて、女性の結果を見ていくと、5つ全ての尺度について肯定的対人態度群の方が有意に得点が高かった。具体的には、父との親密感尺度は、($t=2.54$, $df=189$, $p<.05$)、母との親密感尺度は ($t=4.71$, $df=190$, $p<.001$)、父親から母親への肯定的な働きかけ尺度は ($t=3.15$, $df=189$, $p<.01$)、母から父への肯定的働きかけ尺度 ($t=3.11$, $df=190$, $p<.01$)、父母相互の肯定的な働きかけ尺度 ($t=4.28$, $df=188$, $p<.001$) であった。

以上の結果は、男性の場合とほぼ同様のものではあったが、父から母への肯定的な働きかけ尺度に、肯定的対人態度群と否定的対人態度群の間に、男性では見られなかった有意差が見られた。すなわち、女性で肯定的な対人態度をとる人は、父親から母親への肯定的な関わりがあったと認知していると言えるのではないだろうか。

以上の結果をまとめると、父から母への肯定的な働きかけ尺度以外は、男女ともに肯定的対人態度群の方が得点が高かった。父から母への肯定的な働きかけ尺度では、男性には両対人態度群間の有意差が見られなかったが、女性は肯定的対人態度群の得点の方が高かった。

5 考察

5-1 親の養育態度の認知と父母との親密感・父母関係の認知との関連

正準相関分析の結果からは、男女ともに同じ3つの正準相関係数が得られ、第1成分は「父親に受け入れられていること」に関する要因を表すもの、第2成分は「母親に受け入れられていること」に関する要因を表すもの、そして、第3成分は「父親からの拒否的な束縛」に関する要因を表すものと解釈した。この3つの成分の構造は、男女とも共通のものであり、親の養育態度の認知と父母との親密感・父母関係の認知との関連については、男女に差が見られなかったと判断した。

まず、第1成分は、父親・母親それぞれとの親密感が高いことと父母関係を肯定的に認知するほど、父親から受容されたと感じるということを表している。一方、第2成分は、母親との間の親密感が強ければ強いほど、母親から受容されたと認知していることを表している。この2つの成分の解釈からは、父子関係は父親と子どもの二者関係だけではなく、父親と母親との関係の影響を受けているが、母子関係は母と子の二者関係のみで規定されるという違いがあるということが考えられるのではないかと考えられる。これは、Lynn (1978) などが主張した知見と一致するものと言える。

また、第3成分は、父親から母親への肯定的な働きかけと母親から父親への肯定的な働きかけが大きいほど、父親から干渉され自由を許されていないと感じたり、父親から拒否されている、母親から自由を許されていないと感じていることを表している。このことから、子どもが父親と母親のやり取りが多く行われていると感じることが出来る家庭では、父親が子どもに対していろいろな働きかけをしていくのではないかと考えられる。そして、子どもはそのことを過干渉的に感じ、母親もそのような父親の態度に同調していると受け取っているのではないかと考えられる。

以上の3つの成分の構造から、父母関係の認知が親の養育態度の認知に肯定的な影響を与えることには、親との親密感が存在することが前提になることが考えられる。

5-2 基本的対人態度と親との親密感・父母関係の認知との関連

父母との親密感・父母関係の認知と基本的対人態度との関係を見ると、男女ともに母親との間に親密感を強く感じていると、親和的な対人態度をとるようになっていた。これは、Lynn (1978) などから、母親が持つ性役割とされる表出的役割の肯定的な側面を観察し、モデリングした結果と言えるのではないかと考えられる。

また、父親・母親との間に強い親密感を感じていると、対人態度が孤立的ではなくなることは、親からの支持を感じたことで自信を与えられた結果、肯定的な対人態度をとることが出来るようになったということではないかと考えられる。

男性の場合は、母親との間に親密感を感じていたら、指導的な態度をとるようになっていた。これは、親との間に親密な関係を築けたことによって得られた自信は大きなものであり、このことによって、対人場面に積極的に出て行くことが出来るようになっていくということが考えられる。

また、父親から母親への肯定的な働きかけがあったと認知していることによっても、対人態度が親和的になっていく。この結果から、人に対する親和的な態度は、母親からは親密な関係を築くことで直接的に取り入れていくが、父親からは、直接子ども自身に向けられた態度ではなく、父親から母親に向けられた態度を観察することを通して学んでいることが示されたと言えるのではないかと考えられる。これは、Lynn (1978) などが主張した、母親との関係は基本的に二者関係のみで成立しうるが、父親との関係は父母関係などの影響も大きく受けるという知見に沿ったものであると言えるであろう。

また、母親との間の親密感があった時には、敵対的な態度をとらないようになっていた。これは、母親との間に親密な関係を築くことができたことにより、基底不安の中の敵意を過剰に持つことがなかったためと言えるのではないかと考えられる。また、Parsonsの親役割理論から考えれば、母親が持つ表出的役割の肯定的な部分をうまく取り入れた結果であるとも考えられる。

最後に、父母相互の肯定的な働きかけがあったと認知していると、指導的な態度をとって、孤立的な態度はとらなくなるという結果については、例えば、Lynn (1978) などが主張するように、母親が父親のことを肯定的にとらえていることを見て、父親との適切な関係を学んで、それが一般的な対人態度へと転移していったものと考えられる。

5-3 肯定的・否定的対人態度と親との親密感及び父母関係の認知との関連

本研究では、父親・母親ともに親との親密感は、肯定的対人態度群の方が高くなるという結果となった。これは、Horney (1937, 1945) が主張するように、安全で尊敬の念に満ち、寛容で暖かさのある家庭で育てられた子どもは、基本的葛藤を生じることがなく、3つの基本的対人態度の調和をうまく保って、好ましい対人態度をとることが出来ることを証明していると考えられる。

また、母親から父親への肯定的な働きかけ尺度と父親と母親相互の肯定的な働きかけ尺度の得点が、肯定的対人態度群で高いことから、Lynn (1978) が言うように、母親が父親のことを肯定的にとらえている子どもは、母親から母親自身及び父親の良い面が積極的に伝えられ、それを学び取って子どもはそれをもとに好ましい対人態度をとれるようになるという結果が反映されていると考えられる。

さらに、父親から母親への肯定的な働きかけ尺度では、女性にだけ肯定的対人態度群と否定的対人態度群の間に有意差が見られた。このことから、女性の方が男性よりも父母の関係をよく観察しているという可能性も考えられる。

引用文献

- 馬場禮子 1990 家族の心理臨床 岡堂哲雄・鏑幹八郎・馬場禮子(編) 家族と社会(臨床心理学大系第4巻) 金子書房, Pp. 2-39.
- Foley, V.D. 1974 *An introduction to family therapy*. Grune & Stratton, Inc. 藤縄昭・新宮一成・福山和女(訳) 1984 家族療法—初心者のために 創元社
- 長谷川浩 1999 基本的不安 日本家族心理学会(監修) 家族心理学事典 金子書房, p. 89.
- 橋本和幸・高木秀明 2005 大学生の基本的対人態度と両親の養育態度との関連 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集, 5, 57-76.
- Horney, K. 1937 *Neurotic personality of our times*. New York: Norton 我妻洋(訳) 1973 現代の神経症的人格 (ホーナイ全集第2巻) 誠信書房
- Horney, K. 1945 *Our inner conflicts: A constructive theory of neurosis*. New York: Norton 我妻洋・佐々木護(訳) 1981 心の葛藤 (ホーナイ全集第5巻) 誠信書房
- 金子俊子 1989 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 北村俊則 1988 精神症状測定 of 理論と実際—評価尺度, 質問票, 面接基準の方法論的考察 海鳴社
- 近藤章久 1990 ホーナイ 小川捷之・福島章・村瀬孝雄(編) 臨床心理学の先駆者たち(臨床心理学大系第16巻) 金子書房, Pp. 251-267.
- Lynn, D.B. 1978 *The father: His role in child development*. Wadsworth Publishing Company, Inc. 今泉信人・黒川正流・生和秀敏・浜名外喜男・吉森讓(共訳) 1981 父親—その役割と子どもの発達— 北大路書房
- 松田惺 1993 父—子関係 柏木恵子(編著) 父親の発達心理学—父性の現在とその周辺 川島書店, Pp. 227-266.
- 西平直喜 1964 青年分析—人間形成の青年心理学 大日本図書
- 岡堂哲雄 1990 家族臨床心理の理論モデル 岡堂哲雄・鏑幹八郎・馬場禮子(編) 家族と社会(臨床心理学大系第4巻) 金子書房, Pp. 41-82.
- Parker, G., Tupling, H. & Brown, L.B. 1979 A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychiatry*, 52, 1-10.
- Perris, C., Jacobson, L., Lindstroem, H., von Knorring & Perris, H. 1980 Development of a new inventory for assessing memories of parental rearing behavior. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 61, 265-274.
- 染矢敏幸・高橋三郎・門脇真帆 1996 EMBU尺度(養育体験認知に関する自己記入式調査票)の日本語版作成と信頼性検討 精神医学, 38, 1065-1072.
- 上田亜希子 1999 大学生の父親認知と自己受容感の関連性について—「父親を捉え直すこと」の意義とその性差— 平成11年度横浜国立大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)